



2011.3.11 東日本大震災

現地支援委員会

ニュースレター

「第11号」

2014年2月25日

from 東北

全国の諸教会の皆様、日頃から祈りと献金によるお支えをありがとうございます。震災から三年。大雪に見舞われた東北で、明日のために苦闘している方、未だ生活の目途が立たない方がおられます。引き続きお祈りください。今号では、吉岡伝道所の支援活動、南光台教会の支援活動をお伝えします。

吉岡伝道所の支援活動

被災から支援へ

☞ テキサスからのボランティアチーム

54年間続いた吉岡伝道所の幼児教育活動「ひかりの園」が無期限休園の月を迎えた2011年3月11日、東日本大震災が起こりました。仙台北教会を母教会とする吉岡伝道所の再建を目指して野口直樹牧師が赴任して8ヶ月目のことです。大きな被害もなく残った会堂を主は不思議な方法でフル活用されました。本来、連盟の野口哲哉宣教部長に届くはずのテキサスバプテストからのメールが野口直樹牧師に直接送られてしまい、「どこでも良いから泊めてください」という依頼に、「いつでもどうぞ」と直接返事を出したのです。当時連盟では、被災地にある教会を配慮し、支援者、視察者の被災地訪問をコーディネート、整理を担ってくださっていたのですが、特別なルートが開いたことによって、米国を主体とするボランティアが吉岡伝道所に泊まることになりました。このようにして宣教団、南部バプテスト連盟諸教会と大震災を契機に強い協力の絆が結ばれたのです。



頼もしい奉仕者たち

やがて、野口牧師が宿泊受付係、山崎博加さんがチームを組織して送り出す役目のコーディネーター、野口直（野口牧師の孫）さんをはじめ、現場に出ている人が現場リーダーとして、活動が軌道に乗って行きました。最初の年の8月は一日の宿泊者平均「20.1」という記録が残っています。推定、今日までの3年間に3,000~4,000人のボランティアが吉岡伝道所を宿泊所として利用してくれたのです。

☞ (左) ボランティアの宿泊風景

☞ (右) 避難所慰問の様子



協力の広がり

☞ 瓦礫撤去作業

野口牧師の知人で、石巻の中学校で教師をしている女性の消息が取れず、仲間の十数名が手を尽くして探していたのですが、ようやく門脇中学校体育館避難所に名前が載っていることがわかりました。この仲間というのは25年も前、米国のクリスチャン家庭にホームステイしてキリスト教に接してもらおうというプロジェクトと一緒に旅行をした仲間です。早速仲間が駆けつけて来て、一面瓦礫の沼と化した、火災の煙が残る門脇地区を見下ろすところで涙の対面をしました。それがきっかけで、宗派を超えたクリスチャンボランティアの受け入れが始まったのです。



祈りの絆の中で

活動の中心は石巻です。2011年9月からは仮設住宅が建ち始め、それでも避難所暮らしが続く人もおられ、運良く仮設住宅に当たってもどの地区になるかわかりません。遠くに離ればなれになって引っ越して行く人等々、だんだんと生活が多様化、個別化していきました。吉岡伝道所の出来ることは何でしょうか。「息の長いお交わりを」、「送り手から受け手へ、温もりの伝わる支援を」、「人も金力もありませんが、私にあるもの、イエスさまをご紹介します」を最高の支援と心得て、努めて行きたいと願っています。(吉岡伝道所 野口直樹)



☞ 仮設商店街で学生たちによる盆踊り



☞ 仮設商店街で音楽慰問



☞ 各地からの支援に感謝!

南光台教会の支援活動

震災からもうすぐ3年になろうとしています。2012年4月から宮城チームは仙台地区の4教会1伝道所で構成することになり、一ヶ月に一度牡鹿半島に訪問し、新鮮な野菜配りやお茶っこを通しての交流を続けてきました。そこに南光台教会も参加を続けています。訪問している5つの地区のうち、牡鹿半島の先端、金華山が目に見える鮎川地区に、私のかつての教え子が、仮設商店街で鯨肉やわかめを販売しており、参加できる時には顔を見て交流をします。ある地区では公営住宅が建つまでこれからあと5年かかるそうです。その都度「支援」の意味を問い直しながら、その地の漁業関係者と共にその教え子と家族が、公営住宅に住むことができるようになるまで、関わりを続けたいと願っています。

「見えない」放射能はそれを意識した時に「現れ」ます。今年度はまだ実施できていませんが、その意識化のために南光台教会では専門の講師や放射能被災支援に関わる方々をお呼びし、地域に開いて学習会を数回行ってきました。そこで実感させられたことは、体の中に取り込んでいつかは分からないが、何らかの形で被曝症状に悩まされるという、「見えないもの」が見えるかたちで「現れる」可能性がある「内部被曝」という真実味

のある話でした。特に、将来を担う子どもたちが集団で被害者となるかもしれないという予言です。そのことが科学的に検証される時が確実にくるだろう、という言葉に恐れを覚えました。なんとか原発事故後の世界を共に生き、見えないものを意識化していく働きをこれからも模索したいと思っています。

教会ではまた、被災後に示された課題を担うために牧師を「仙台キリスト教連合被災支援ネットワーク・東北ヘルプ」や、宗教間協力支援「心の相談室」による「吊い」の業などの活動へと送り出しています。またマレーシアやミャンマーで行われたバプテスト大会などへの連盟派遣を通して津波・放射能被災のその後を伝える働きも支えてきました。

今後とも全国諸教会のみなさまの祈りを力として、今までの経験を活かしつつ、被災地に立てられた教会の役割の一端を担って行きたいと思っています。みなさまのかわりないお祈りとご支援に感謝します。

(南光台教会 鈴谷輝秋)

☞ (左) 第3回放射能学習会「内部ひばくを生き抜く」DVD上映

☞ (右) 2012年9月APBF大会(マレーシア)「教会と被災支援」分科会での報告

